



Title	中国山東省学術調査報告
Author(s)	戦国楚簡研究会
Citation	中国研究集刊. 2009, 48, p. 172-189
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61200
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国山東省學術調査報告

戰國楚簡研究会

一、調査旅程の概要

二〇〇八年（平成二十年）九月二日から九月八日にかけて、戦國楚簡研究会は中国山東省において学術調査を行つた。

二〇〇一年以来、本研究会は、上海博物館の訪問、大阪大学における国際シンポジウムの開催、清華大学、武漢大学、台湾大学、東吳大学等において開催された国際学会への参加など、国際的な学術交流を積極的に進めてきた。今回の調査は、二〇〇五年の湖北省荊門・荊州地区の学術調査、二〇〇六年の湖南省長沙地区の学術調査、そして二〇〇七年の陝西省西安・宝鸡地区的学術調査に続き、中国出土文物ならびに古代思想史関係史跡の調査を目的として実施したものである。（ゴシック体は後節で詳述

する項目）

九月二日

関西国際空港に集合。空路、山東省青島へ。

青島から淄博へ。途中、臨淄にて、古車博物館、齊国歴史博物館、殉馬坑見学。晏子墓、齊四王（威王・宣王・湣王・襄王）墓視察。淄博泊。

九月三日

午前、管仲墓・管子記念館訪問。広饒へ移動、孫子祠見学。濱州へ移動。午後、魏氏莊園、孫子故園、孫子兵法城見学。濱州泊。

九月四日

午前、管仲墓・管子記念館訪問。広饒へ移動、孫子祠見学。濱州へ移動。午後、魏氏莊園、孫子故園、孫子兵法城見学。濱州泊。

九月五日

午前、泰山へ。泰山玉皇廟、孔子廟見学。午後、曲阜へ移動。明代城壁、孔廟・孔府・孔林、周公廟、少昊陵見学。曲阜泊。

九月六日

午前、孔子研究院見学。嘉祥へ。武氏墓群石刻博物館視察。滕州へ移動。午後、墨子紀念館、滕州漢画像石館見学。曲阜泊。

九月七日

午前、沂南へ。諸葛亮故里記念館見学。午後、临沂へ。銀雀山漢墓竹簡博物館訪問。

九月八日

临沂発、青島へ。青島空港から関西国際空港へ。関西国際空港にて解散。

临沂市博物館見学。临沂泊。

なお、調査旅行の準備として、渡航二月前(七月上旬)山東省博物館と銀雀山漢墓竹簡博物館に手紙を送り、訪問の日程と目的を伝えた。それぞれ好意的なお返事をいただき、面会が実現した。

(湯浅邦弘)

二、晏子墓と管仲墓・管子記念館



参加メンバー
(山東省孫子故園孫武像前にて)

参加者は、浅野裕一(東北大学大学院)・湯浅邦弘(大阪大学大学院)・福田哲之(島根大学)・竹田健二(同)、福田一也(日本学術振興会特別研究員)、草野友子(大阪大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)、白雨田(大阪大学大学院生)の七名である(写真)。

九月一日の午後、青島に到着した我々は齊国の都であった臨淄(現在の淄博市)に移動し、古車博物館、齊国歴史博物館、殉馬坑を見学した後、晏子墓へと向かった。周りは見渡す限りのトウモロコシ畑で、その中にひとつりと鎮座しているのが晏子墓であった。バスを降り、狭い農道を五十メートルほど歩くと右手に墓へと続く石碑も併設されている。筆者は十二年前(一九九六年)にもここを訪れたことがある。当時はまだ参道はなかつたと記憶しているが、それ以外は十二年前とほとんど変わりないものであった。夕暮れ時で辺りは静まりかえつており、節儉を尊んだ晏嬰の姿が偲ばれるようであった。

翌九月三日の早朝、我々は臨淄市街の南、牛山北麓に位置する管仲墓を見学した。途中、車高制限のある高架下を通過せねばならず、専用バスから乗用車に乗り換えて現地へ向かった。十二年前（一九九六年）に同墓を訪れた際には、質素な管仲の墓碑が立てられてい

るのみであつた。しかし現在、管仲墓は立派に整備され、管子記念館として完全に観光地化されていた。まず正門前では、威風堂々たる管仲像が我々を出迎える。その奥には黄色を基調とした宮殿風の建物がならび、「斉」と記された黄色の旗がたなびいていた。建物の中には管仲記念館となつており、「管鮑之交」等の管仲にまつわる有名な場面が等身大の人物により再現されている。印象的だったのは、建物の東西に「文治」と「武事」の文字が掲げられていることであつた。管仲の政治は、文武両道であつたということを表しているのである。中

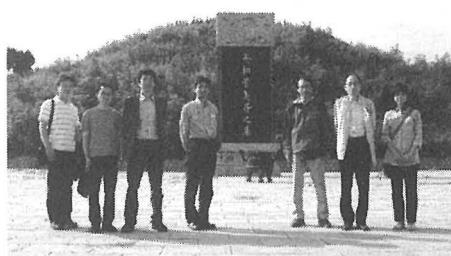


晏子墓

央後方にある「管仲祠」を抜け、奥の階段を登ると、ようやく管仲墓に到着した。先の晏嬰墓とは比較にならないほど立派なお墓で、黒塗りの墓碑に金文字でくつきりと「齊相管夷吾之墓」(写真)と刻まれている。晏嬰と管仲はともに古代齊国の賢臣だが、彼らに対する現在の評価は、両者の墓を見る限り、歴然とした違いがあるようだ。

かつて「臨淄の中は七万戸：車轂擊ち、人肩摩れ：」(『戦国策』・『史記』)と謳われた盛時の面影はないものの、近年における中国の経済発展により、臨淄の街は飛躍的な発展を遂げているように感じられた。臨淄の街並みが一望できるこの高台から、管仲はどのような思いでこの変化を眺めているのであろうか。

(福田一也)



管仲墓

三、山東省博物館

九月四日、我々は濱州のホテルを朝七時半に出発、高速道路で省都の濟南へ向かい、午前十時すぎに山東省博物館に到着した（写真A）。前述の通り、山東省博物館には渡航前に手紙で訪問を連絡してあった。館長の魯文生氏は出張中とのことであったが、文物管理部主任の王之厚氏が代わって我々と会い、銀雀山漢墓竹簡を見せてくださることになっていた。



写真A 山東省博物館

山東省博物館は、中華人民共和国の建国後最初に設立された省レベルの博物館で、一九五四年に設立、一九五六六年に公開された。現在の建物は、一九九一年八月に建築が始まり、一九九二年十月から公開されているものである。収蔵品は十

数万件に及び、その中心は、青銅器・画像石・陶磁器・簡牘などの歴史的な文物とされる。
なお、本博物館のパンフレットには、「現在建設中の山東省博物館新館予想図」のイラストが示されていた。ただし、イラスト以外に説明はなく、また敷地内で現在建築工事が行われている様子は確認できなかつた。
博物館に到着後、我々は保管倉庫のある建物の一室に通され、そこで銀雀山漢墓竹簡を実見した。我々が実見した竹簡は二十枚である。（写真B・写真C）
竹簡は、薄いガラス板によつて表・裏両面から挟まれて、糸で縛つて固定された状態で、保存のための液体を満たした試験管に一枚ずつ入れられていた。試験管は、約三十七センチの長いものが十七本、そのおよそ半分程度の短いものが三本であつた。合計二十本の試験管は、ふた付のケースに並



写真B 銀雀山漢墓竹簡の実見

べて納められていた。

二十枚の竹簡のうち、完簡は一枚、残簡は九枚である。完簡と六枚の残簡は長い試験管に、三本の短い残簡は短い試験管に、それぞれ納められていた。各試験管には、口のやや下の部分に、白い文字で二～三桁のアラビア数字が記されていた。整理のために記されたものと推測される。但し、二十本の試験管に記された数字は連番ではなかつた。我々が実見したもののは、比較的状態のよい竹簡が選ばれているのではないかと思われた。

なお、実見に当たつては、竹簡・試験管そのものの写

真撮影が禁止された。

竹簡・試験管の様子については、『大黄河文明の流れ 山東省文物展 図録』（西部美術館・朝日新聞社、一九八六年）一三三二頁のカラーフotoを参考されたい。我々が実見したものとほぼ同じである。実見の際、完簡の縞は三道であること、



写真C 銀雀山漢墓竹簡の実見

契口は右契口であること、また竹簡に「孫子曰」や「威王問孫子曰」などと記されていることが確認できた。おそらく実見した竹簡は全て『孫臏兵法』の一部と思われたが、齊孫子・吳孫子のいずれの文献に属するものであるのかについて、特に説明はなかつた。

竹簡の実見に続いて、王之厚氏と面談した（写真D）。銀雀山漢墓竹簡に含まれている多数の残簡について、現在調査・研究が進展しているかどうかを質問したところ、王氏の回答は以下の通りであつた。

銀雀山漢墓竹簡は、一九七二年の出土の後、研究については北京が中心となり、山東省博物館は竹簡の保存・管理を中心に取り組んでいる。現在竹簡は、本博物館の専用の倉庫において保管している。竹簡は保存のための液体を充たした試験管に入れているが、出土当時、北京の胡繼高氏と連絡を取り、一部の竹簡について脱水加工を行つた。ところが、竹簡が多量で、資金的な問題もあつたため、脱水加工を行つた竹簡は一部に止まつた。七〇年代の末頃には、脱水加工を加えるべきかどうかの論争もあり、また脱水加工を行つても行わなくとも、竹簡は五十年しかもたないとの見方があつた。その後、資金的には

問題が無くなつたが、脱水加工を行つた竹簡は文字が少しづやけて見えたため、他の竹簡に脱水加工を行ふことは中止した。博物館としては、現在の保存処置のままで、人の目で見る限り、竹簡は出土当時からあまり変化がないと認識している。竹簡の保存のためには、一定の環境を保ち、光などを当てないことが大切であるから、特別な展覧会などがなければ、基本的には公開しないことにしてある。現在も本博物館は北京の胡氏と連絡を取つており、善い保存の方法があるかどうかを検討している。戦国楚簡が出土した湖北省とも連絡を取つてゐるが、湖北省側は地域差があるということを理由に、我々に協力的ではない。このため、我々はやはり北京を頼りにしている。日本の先進的な技術にも関心を持つており、今後の共同研究にも期待している。

王氏の話に出てきた竹簡の脱水処理については、出土した竹簡の整理に当たつた胡繼高氏の論文「銀雀山和馬王堆出土竹簡脱水試験報告—兼論醇—醚連浸法原理」(『文物』一九七九年第四期)に詳しく論じられている。この論文によれば、様々な方法と薬品を用いた試験の結果、銀雀山漢墓竹簡には、アルコール—エーテル—樹脂法に

よる脱水処理が行われた。その際に重視されたのは、脱水処理後の竹簡が裂けて変形することが無く、文字がはつきりと見え、また色つやや質感も問題がないことである。ほぼ同じ時期に出土した馬王堆漢墓の竹簡は比較的の保存状態がよかつた(含水量は約三〇%)が、銀雀山漢墓竹簡は出土時点では既にかなり傷んでおり(平均含水量は七六、八五%)、同じ脱水処理法では対応できなかつたとのことである。王氏の話では、脱水加工を行つた竹簡の文字は少しづやけて見えたとのことだが、胡氏の論文にはそうしたことについては述べられていない。

面談の最後に、今後残簡の写真を公開する予定があるかどうかを王氏に尋ねたところ、残簡を含めて、竹簡の写真は北京ですべて撮影済みである、既に出版した『銀雀山漢墓竹簡』(銀雀山漢墓竹簡整理小組編、文物出版社、一九八五年)に収められた『孫子兵法』『孫臏兵法』に続



写真D 王之厚氏との面談

いて、他の文献も出版する予定で、整理中である、との回答があつた。

但し、研究の進展と公開の準備とに関する具体的な説明は無く、実現はあまり期待できないとの印象を受けた。

文化大革命中に出土した銀雀山漢墓竹簡は、乱暴な発掘によつて出土の際に激しく傷んだ上に、保存・管理をめぐつて様々な問題に直面し、更に損傷が加わつたようである。特に小さな断片となつてしまつた残簡については、現在は研究がほとんど不可能な状態ではないかと危惧される。なお、銀雀山漢墓竹簡の出土状況やその後の経緯については、『孫子兵法発掘物語』（岳南著、加藤優子訳、浅野裕一解説、岩波書店、二〇〇六年）が参考になる。

王氏との面談の後、我々は一旦博物館を出て昼食をとり、再び博物館に戻つて館内の展示を見た。その時初めて気付いたのだが、館内に銀雀山漢墓竹簡に関する展示は一切無かつた。調査に参加した福田一也氏が、一九九六年八月に山東省博物館を訪れた際には、数十本の竹簡の展示（おそらくレプリカ）があつたとのことである。現在展示を行つていない理由については分からぬ。

戦国楚簡研究会が二〇〇五年に行つた湖北省荊門・荊州学術調査旅行の帰途立ち寄つた上海博物館書法館でも、

以前はあつた戦国楚簡のパネルの展示がなくなり、収蔵されている戦国楚簡に関する展示が一切見あたらないといふことがあつた（『湖北省荊門・荊州学術調査報告』〔中国研究集刊〕第三八号所収「二〇〇五年」参照）。貴重な資料を保管するために現物そのものの公開をひかえるのは当然であろうが、関連する展示すらまつたくないのでは、研究に資する情報が得られないだけでなく、竹簡に対する一般的の理解も広まらない。出土した竹簡を収蔵する博物館は、積極的な展示を行つてほしいものである。

（竹田健二）

四、武氏墓群石刻博物館

武氏墓群石刻博物館は、曲阜から専用バスで約二時間、嘉祥県の東南約十五キロの武氏祠旧跡に位置する。博物館の正門を入つて正面には武氏祠画像石を中心とする武氏祠石刻の陳列館があり、右側には新出土の画像石を中心とする嘉祥新出土石刻の陳列館が増設されている。

武氏は殷王武丁の後裔とされ、東漢期には任城（嘉祥県）の豪族として知られた。武氏祠はこの武氏一族の墓前に建てられた祠堂である。武氏石闕銘や武氏関係の碑

文などにより、その年代は後漢の桓帝期の建和元年（一四七）から靈帝の建寧元年（一六八）頃と推定されている。北宋の歐陽脩『集古錄』、趙明誠『金石錄』、南宋の洪适『隸叢』『隸統』など、宋代の文献には武氏祠石刻に関する記録が見えるが、その後、河水の氾濫によつて埋没し、清の乾隆五十一年（一七八六）の黃易による発掘を契機として、広く内外に知られるに至つた。正面展示室には現在、石闕一対・石獅一対・石碑六種（漢碑二種・清碑四種）・画像四十四石が展示されている。一方、嘉祥新出土石刻の陳列館には、解放後に嘉祥県を中心とする宋山・五老洼・紙坊鎮・徐村・狼山屯・南武山・齊山などの地域から出土した百余りの画像石のうち、山東省博物館収蔵分を除くおよそ四十余りが展示されている。

武氏祠石刻については、容庚『漢武梁祠画像錄』（一九三六年、北京）をはじめとして数多くの図録や論著が備わる。近年のものでは、朱錫祿編著『武氏祠漢画像石』（山東美術出版社、一九八六年）が、内外に流出した石刻も網羅し、武氏祠石刻の全容をうかがう上で有益である。また嘉祥新出土石刻についても、嘉祥県武氏祠文管所「山東嘉祥宋山發現漢画像石」（『文物』一九七八九年第九期）、濟寧地区文物組・嘉祥県文管所「山東嘉祥宋山一九八〇年出土的漢画像石」（『文物』一九八二年第五期）、

嘉祥県文管所朱錫祿「嘉祥五老洼發現一批漢画像石」（同上）などに出土報告があり、朱錫祿編著『嘉祥漢画像石』（山東美術出版社、一九九一年）には、「嘉祥漢画像石概論」とともに一六〇石におよぶ「図版」「図版説明」が収録されている。

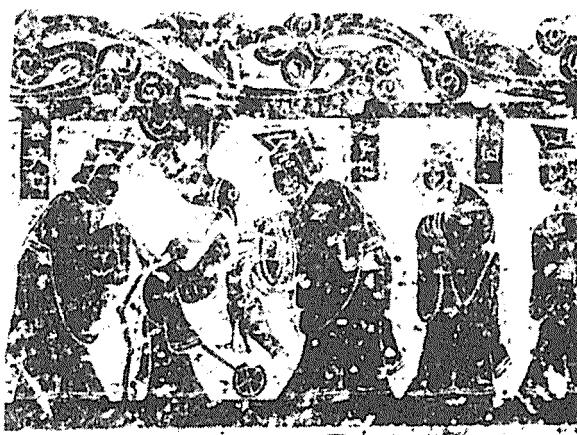
このように武氏墓群石刻博物館の収蔵品の概要については、すでに詳細な紹介がなされており今さら贅言を要しないことから、本稿では当館において過眼した石刻のうち、思想史研究の面で注目される「孔子見老子」画像石と新出土の文字資料である「武仲興道従達」刻石を中心にお伝えしたい。

「孔子見老子」画像石

武氏墓群石刻博物館に収蔵された数多くの画像石の中で、とくに我々の注目を集めたのは嘉祥新出土石刻の陳列館に展示されていた二種の「孔子見老子」画像石であつた。上述した『嘉祥漢画像石』によつて確認すると、「図83齊山画像第3石」第一層および「図126紙坊鎮敬老院画像第1石」第二層に該当することが知られる。

以下にそれぞれの「図版」および「図版説明」を引用する。

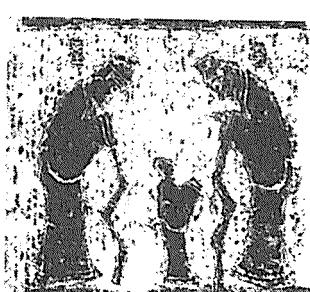
図 83 齊山画像第3石 第1層（部分）



第一層、刻孔子見老子図。老子面向右、手拄一拐棍、孔子面向左、大袖筒中伸岀兩只鳥頭。孔子和老子之間有一兒童、右手推一小独輪、左手抬起、面仰起向孔子、此兒童當為項橐。孔子背後為顏回、双手抬起于胸前。此三人之背後上方有題榜曰、"老子也" "孔子也" "顏回"。老子身後有子弟七人。

孔子身後有子弟共二十人、其中子路頭戴雄鷄冠、腰懸小野猪、双袖上將至臂、頭右方一榜曰、"子路"。

図 126 紙坊鎮敬老院画像第1石 第2層



第二層、刻孔子見老子図。孔子和老子均頭戴進賢冠、身着長袍、拄一彎曲的拐杖相對頷首施禮。背後分別刻隸書題榜"孔子" "老子"。孔子和老子之間、一兒童側身面向孔子立、似在說話、這人應為項橐。

これらはいずれも『史記』孔子世家などが記す孔子と老子との会見の場面、いわゆる孔子問礼図とされるが、注意を要するのは、両者の間に一人の童子が立ち、孔子の方を向いて何か話をしている様子が画かれている点である。『図版説明』によれば、この童子は項橐とされ、図 83 の項橐は車輪のついた玩具のようなものを押している。『孔子見老子』画像は他の画像石にも散見されるが、はたしてそれらにも項橐なる童子が登場しているのであろうか。この点について調査するために、先に掲げた図 83・図 126 を含む管見の及んだ武氏祠・嘉祥出土画像石図録中の『孔子見老子』画像石をリストアップすると、「別表」に掲げた十三例が確認される。

〔別表〕武氏祠・嘉祥出土画像石にみえる「孔子見老子」

画像一覧

著録	編号	「孔子見老子」画像	No.
其他第八石	図六九	蔡氏園画像第5石第一層	①
蔡氏園画像第5石第一層	図11	呂村画像第1石第一層	②
呂村画像第1石第一層	図32	洪家廟画像石第一層	③
洪家廟画像石第一層	図36	宋山画像第5石第二層	④
宋山画像第5石第二層	図47	宋山画像第7石第三層	⑤
宋山画像第7石第三層	図49	宋山第二批画像第1石第二層	⑥
宋山第二批画像第1石第二層	図51	斎山画像第3石第一層	⑦
斎山画像第3石第一層	図83	五老洼画像第7石第三層	⑧
五老洼画像第7石第三層	図91	五老洼画像第9石第三層	⑨
五老洼画像第9石第三層	図93	紙坊鎮敬老院画像石第一層	⑩
紙坊鎮敬老院画像石第一層	図126	孔子見老子画像石第一層	⑪
孔子見老子画像石第一層	図129	孔子見老子画像石第一層	⑫
孔子見老子画像石第一層	C	孔子見老子画像石第一層	⑬

著録△

朱錫祿編著『武氏祠漢画像石』（山東美術出版社、一九八六年）

C 魯文生主編『山東省博物館藏珍・石刻卷』（山東文化音像出版社、一〇〇四年）

（なおCの図30にも「孔子見老子画像石」が掲載されているが、これは④に掲げたBの図36と同一である）

ここに挙げた「孔子見老子」画像石はすべて、孔子と老子との間に童子が立ち、孔子の方を向いて何か話をしているような共通の構図をとる。さらに①～⑧⑬は童子が片方の手で車輪のついた玩具のようなものをもち、①～⑧⑬はもう一方の手を挙げて孔子に何かを指示している。童子がもつ車の車輪は①②⑤～⑧⑬は単輪であるが、③④では明らかに両輪に画かれていることから、前者は二輪車を側面形として画いたものと理解してよいであろう。

これらの解説においても、孔子と老子との間に立つ童子は項橐であるとされるが、項橐と孔子および老子との関係について言及したものはないようである。そ

れでは、老子・孔子・項橐の三者はどのような関係にあり、項橐と孔子との間にはいかなる問答が交わされたのであろうか。

伝存文献中に見える項橐の関係資料は、錢穆「項橐攷」

(『先秦諸子繁年』卷一、「二六 孔鯉顏回卒年攷」附)

にほぼ網羅されている。それによれば項橐は項託とも表記され、伝存文献では『戰國策』卷七・秦策五にみえる「甘羅曰、夫項橐生七歲而為孔子師」との記述が最も古い。ほぼ同じ記述は『史記』卷七十一・甘羅伝、『淮南子』

卷十九・修務訓、『新序』卷五・雜事第五、『論衡』卷二

十六・實知篇にもみえ、七歳にして孔子の師となつた項橐の伝承が漢代に存在したことが知られる。ただし、これららの資料からは項橐と老子との関係はみえてこない。

そこで注目されるのが、「項橐攷」が引用する「嵇康高士傳」乃云、大項橐與孔子俱學於老子」との記述である。嵇康『高士傳』は佚書であり、この記述が何に引用されていたかについて錢穆は記していないが、近年、金文京

氏によつて『玉燭宝典』所引の嵇康『高士傳』佚文に、先の一条とともに「孔子見老子」画像の意味を知る上でさらに重要な記述が認められることが指摘された(金文京「孔子の伝説——「孔子項託相問書」考——」『説話論集 第十六集』清文堂出版、二〇〇七年)。『玉燭宝典』は

六朝末に杜台卿が著した歳時記であり、中国では亡んでも我が国に伝存した逸存書の一つとして知られる。画像石に対応する嵇康『高士傳』の逸文は『玉燭宝典』四月孟夏第四に以下のとく見出される。

嵇康高士傳乃言、大項橐與孔子俱學於老子。俄而大項橐爲童子推蒲車而戲。孔子候之、偶而不識。問大項橐曰、居何在。曰萬流屋是。到家而知、向是項子也。友之與之談。

嵇康高士傳は乃ち言う、大項橐 孔子と俱に老子に学ぶ。俄にして大項橐 童子と為りて蒲車を推して戯る。孔子之を候ぬるに、偶も識らず。大項橐に問いて曰く「居は何くに在り」と。曰く「万流の屋是れなり」と。家に到りて知る、向かえるは是れ項子なるを。之を友とし之と談れり。

この記述は、老子と孔子との間で車を押す童子の項橐を描いた「孔子見老子」画像石とよく一致し、その意味を知る上で貴重な手がかりを提供する。しかしながら疑問とすべきは、「孔子見老子」画像石は、その多くが老子に対面して双手拝礼する孔子を描いた、いわゆる問礼図の

形式をとることからもうかがわれるよう、まさに老子に教えを乞わんとする孔子の姿を描いたものであり、『高士伝』逸文に記されるよう、項橐と孔子とがともに老子に学んだ後の場面とはいさか状況を異にする点である。画像資料と文献資料との接合については、慎重な態度が必要であり、いたずらに想像をたくましくすることは慎まなければならないが、あるいは問礼のために老子を訪ねた孔子に対して、老子の高弟として仲介役を務める童子項橐の伝承が存在していた可能性も考慮されるのではないか。

いずれにしてもこれらの文献資料との比較作業を通じて、「孔子見老子」画像石には、孔子問礼という主題とともに今日では失われた孔子項橐問答という主題が組み込まれていたことが明らかとなる。こうした点にも、文献資料の空隙を埋め得る画像資料の独自の価値を認めることができよう。

「武仲興道従達」刻石

武氏墓群石刻博物館の収蔵品は、言うまでもなく画像石が中心的位置を占めるが、文字資料の面でも武班碑・武氏石闕銘・武氏祠画像石題記など、貴重な石刻が含まれている。以下に紹介する「武仲興道従達」刻石は、一

一九九二年春、嘉祥県文物局は武氏祠東南の二基の漢墓を調査し、二号墓の前室から「武仲興道従達」刻石を発見した。二号墓は、墓室の外壁が東西八・九五メートル、南北四・九五・五・四〇メートル、墓門・前室・中室・後室・耳室・回廊の六部分から構成される。墓室はすでに破壊され、盜掘により副葬品も失われていた。「武仲興道従達」刻石は長方形の石柱からなり、高さ九〇センチ、上半部は幅二二センチ、厚二〇センチ、下半部はやや粗雑な作りで、幅・厚各二四センチ。刻字は石柱の上半部に位置し、刻字に用いられた鑿（のみ）は平鑿、四四×七センチの長方形の平面に「武仲興道従達」の六字が刻されている。一方から刀を通した一刀偏入の刻法による不規則な隸書で、後漢後期の風格を示す。

石柱の形態によれば、下半部の粗削りの部分は地下に埋められ、上半部の刻鑿の比較的細かな部分が

地上に露出していたと見なされる。「武仲興道従達」の「武仲興」は人名、「道」は墓道、「従達」はこの場所から（武仲興の墓道に）達するという意味である。したがって「武仲興道従達」刻石は、もともと二号墓中にあつたものではなく、武仲興墓の墓道前方の地面に立てられた標記石であり、それが二号墓中から発見されたのは、盜掘者などによつて墓室中に投棄されたためと推測される。

これまでに発見された武氏石闕銘と武氏碑文から知られる武氏の家族成員は、四代十一人にのぼるが、これらの資料には「武仲興」の名は見いだされない。ここで注目されるのは、「武仲興」が、建和元年（一四七）に武氏石闕を建立した武氏四兄弟（始公・梁・景興・開明）の一人、武景興と同じ「興」字を名にもつ点である。当時は命名の際に長輩の名字を避ける避諱の慣習があり、それを踏まえれば「武仲興」は武景興と同世代の人物と見なすことができる。したがつて、武氏四兄弟の別名でないとすれば、「武仲興」はその従兄弟（いとこ）であつたと考えられる。

以上の曹氏の検討によつて、「武仲興道従達」刻石は、武氏祠画像石および関連する諸石刻と同様、後漢後期の

資料であることが裏付けられる。曹氏が指摘するように本刻石の最大の意義は「武仲興」というそれまで知られていなかつた武氏新成員の存在を明らかにした点にあるが、同時に漢代石刻書法という面においても独自の価値を認めることができる。以下ではそうした観点から、「武仲興道従達」刻石がもつ書法上の特色について若干の分析を加えてみたい（左図版参照）。

冒頭の「武仲」の二字は、あらかじめ引かれた左右の界線の中におさめるべく、ややかたく謹直に刻される。次の「興道」の二字になると、懷を広げた大らかな調子に変わり、「従」字では一転して小ぶりにおさえたものの、末尾の「達」字は界線内におさまらず、最後は「羊」から「辶」へゆつたりと裾を広げつつ全体をまとめている。このように「武仲興道従達」刻石には、刻者の息遣いをそのままに伝える無造作な率意性が認められ、粗雑である反面、即興的で簡素な風趣が感じられる。

当時の石刻には著名な漢碑が多く、山東省に限つても



乙瑛碑・礼器碑・孔宙碑など、いずれも隸書の古典としてなじみ深い。これらが言わばよそ行きの晴（はれ）の書風であるのに対し、日常的な藝（け）の書風を示す石刻として、墓室の内外に文字を刻した画像石題記や、棺の外側の石組み（黄腸石）に文字を刻した黄腸石題字などが知られている。これらの題記や題字は、墓葬にかかわる石刻という点で共通性をもつが、「武仲興道徳達」刻石のような墓道標記の例は、これまでほとんど報告されていなかつた。

曹氏は先の論文の中で、一九八一年の文物調査の際にも、山東嘉祥県満硐郷鄒莊村にある漢墓の墓道の前上方において、「武仲興道徳達」刻石と同様の風格をもつ「五子畢由此東行」の刻字石柱が発見されたことを紹介している。今後、こうした出土例が増加すれば、漢代石刻の一類として、墓道標記にも注目していく必要があろう。

（福田哲之）

五、墨子紀念館

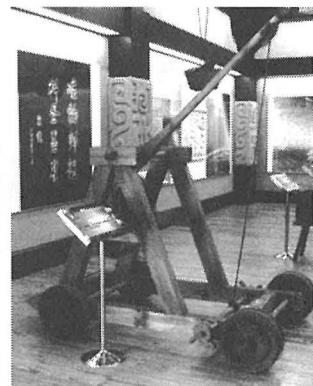
武氏墓群石刻博物館を見学した後、滕州へ移動。墨子紀念館へ向かつた。この紀念館は、一九九三年に学術研

究・図書資料の収藏・科学技術教育のために建設された、墨子の博物館である。「序序」「総合序」「科技序」「軍事序」「聖蹟序」の五つの展示室よりなる。

まず、「序序」にて我々を出迎えた墨子像は、「労働者」であることを強調した凜々しい姿であった。ここでは、中国の偉人たちが墨子をいかに評しているかについて知ることができる。「総合序」には、墨子研究の成果や、国際学会の模様が掲示され、中央には「墨子文化城」と称した模型を設置している。「科技序」では、光学・力学・数学・幾何学・聲音伝播学等に関する展示物が数多くあり、これらの科学技術が墨子に基づくとされている。墨子の軍事思想や防御措置については、「軍事序」にて紹介され、工具や武器等の模型も置かれている。「聖蹟序」には、孔子の『聖蹟図』に模して、墨子の生涯を色鮮やかに描いた「墨子聖蹟図」が展示されている。

この紀念館において、墨





子は「百科全書式学者」「科聖」「偉大的軍事家」等と称され、高い評価を受けている。中でも、「科聖」と称して、科学技術の源流が墨子にあつたとする点は注目に値する。これは近代にヨーロッパの科学が中国に流入してきたことと無関係ではないであろう。中国において墨子は、現代にも通じる思想家の一人として再評価されているのである。

（草野友子）

六、銀雀山漢墓竹簡博物館

九月七日午後、臨沂市の銀雀山漢墓竹簡博物館を訪問した。前述の通り、我々の訪問は渡航前に手紙で博物館側に連絡しており、博物館から來訪歓迎の旨の返信を受け取っていた。

本博物館は、一九七二年四月に『孫子兵法』『孫臏兵法』

などが出土した銀雀山一号漢墓・二号漢墓のある場所に位置している。一九八一年二月に博物館の設立準備が開始され、翌一九八二年に建物の建築が始まり、一九八九年十月に正式に公開された（写真A）。

博物館に到着後、先ず館員の案内で館内の展示を見て回った。博物館の中心的建物は、「銀雀山漢墓廳」と「竹簡陳列廳」である。「銀雀山漢墓廳」は、一九八四年に完成した建物で、銀雀山一号漢墓と二号漢墓の墓坑をすっぽりと覆う形で建てられている（写真B）。もつとも、発掘の際に、二つの墓は棺郭の部分まで周囲の土が掘り下げられた。現在展示されている墓坑や棺郭は、いずれも後に復元されたものである。建物の壁面にパネルで展示されていた発掘当時の様子を撮した写真からも、そのことが分かる（写真C）。

続いて「竹簡陳列廳」を見学した。二階建てのこの建物は一九八七年に完成したもので、一階には『孫子兵法』『孫臏兵法』などに関連する、春秋戦国時代の戦争の様子を示す兵器など



写真A 銀雀山漢墓竹簡博物館

の展示がある。

二階には、銀雀山漢墓から出土

した竹簡や俑、

漆器などの展示

があつた。但し、

この博物館には、

銀雀山漢墓から

出土した竹簡の

实物は一つもな

く、展示されて

いる竹簡はすべ

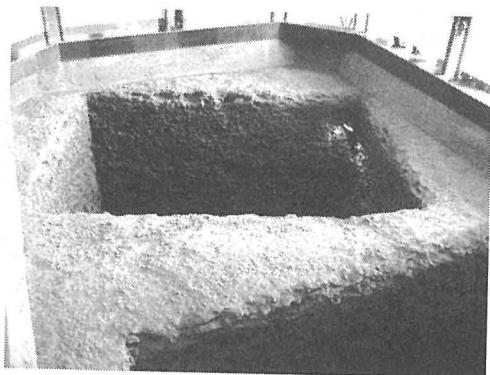
てレプリカであ

る。实物は山東省博物館に収蔵されているのである。

それを受けて、「その第二次・第三次の出版計画とは、具体的にはどのような予定であるか」と尋ねたところ、楊主任は「第二次は医書、第三次は文帝・武帝期の歴譜を出版する予定である。しかし実際に出版されるかどうかは国家文物局の指導如何による。理由は分からぬが現在出版は中断している。詳しい出版予定を知りたければ文物出版社に問い合わせてほしい」と回答された。

更に、「第二次・

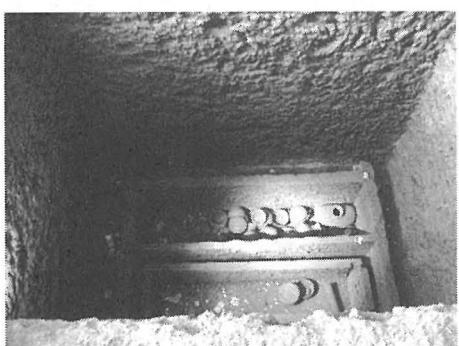
第三次の出版が予定されている文献について、現在研究チームが存在しているのか」と尋ねると、楊主任は「古籍研究所の吳九龍先生を中心



写真B 銀雀山漢墓廐 奥が一号漢墓、手前が二号漢墓の墓坑

次の出版を行つたが、第二次・第三次の出版はまだ行われていない。現在本博物館としては、出土した資料について、それを一般に向けて普及させることに力を入れている」と答えられた。

それを受けて、「その第二次・第三次の出版計画とは、具体的にはどのような予定であるか」と尋ねたところ、楊主任は「第二次は医書、第三次は文帝・武帝期の歴譜を出版する予定である。しかし実際に出版されるかどうかは国家文物局の指導如何による。理由は分からぬが現在出版は中断している。詳しい出版予定を知りたければ文物出版社に問い合わせてほしい」と回答された。



写真C 復元された銀雀山一号漢墓の墓坑と棺郭

研究が行われている。発掘当初は二十人ほどの専門家が研究に取り組んでいたが、現在まで継続して取り組んでいるのは吳先生だけであり、整理作業の速度は遅くなつた。現在本博物館としての仕事は、(内外の研究者・研究組織に対する)接待が中心である」と答えられた。

続けて宋館長が、「現在本博物館は、兵学文化研究会と簡牘文化研究会との、二つの学会の設立を次の目標としている。銀雀山漢墓から出土した竹簡についての研究は、国内外で進んでおり、本博物館としても、国防大学や社会科学研究院の謝貴華氏の指導の下で、専門家や学者を集め、共同作業をするつもりである。また、内外で発表されている資料の収集を行つており、協力いただけるとありがたい。共同研究についても取り組んでいきたい」と述べられた。

その後宋館長から、これまでこの博物館が行つてきた出土二十五周年・三十周年・三十五周年の記念事業・記念出版について説明があり、二〇一二年の四十周年にも記念事業を予定しているので、参加をお待ちしているとの発言があつた。

面談の最後に、「本来銀雀山漢墓竹簡の実物は、山東省博物館ではなく本博物館において收藏されるべきであると考えるが、山東省博物館との間でそうした交渉は行わ

れているのか」と質問した。これに対して宋館長は、「遠からず実現するであろう」と回答され、現在は貴重な資料を安全に保管・管理するための施設の準備が不十分であるため、「原簡廳」を建設し、竹簡の保護や研究に取り組む予定であること、できれば出土四十周年に当たる二〇一二年には実現できるよう、努力している旨の説明があつた。

戦国楚簡研究会では、二〇〇六年に湖南省での調査を実施し、馬王堆漢墓と、馬王堆漢墓から出土した文物を収藏・展示する湖南省博物館とを視察している(『戦国楚簡研究2006』[『中国研究集刊』別冊特集号、二〇〇六年十二月] 参照)。

湖南省博物館の視察では陳松長氏が案内してくれたのだが、一般的の展示スペースに多数の帛書や簡牘などが展示されており、出土資料の展示は大変充実していた。

銀雀山と馬王堆とは、ともに七〇年代前



写真D 館長の宋開霞氏(右)と研究室主任の楊玲氏

半に漢墓の発掘が行われ、多くの貴重な文物が出土したが、現在それぞれの地に立つ二つの博物館は、随分と状況が異なっているのである。馬王堆は、博物館や研究機関が多数存在する湖南省の省都・長沙の市内であり、一方銀雀山は、山東省の省都・濟南から遠く離れた臨沂にあることが、その違いを生んだ大きな要因なのであろう。我々は、銀雀山漢墓竹簡博物館の整備が一層進むことを期待しつつ、博物館を後にした。

(竹田健二)